

幼稚園の定員を考える

福西基

▼一学級当りの園児数

各幼稚園のクラス別収容人員の調査をしようとしても、その資料がないので、茨城県幼稚園連合会編「茨城県国公立幼稚園要覧」昭和55年度版によって、市町村別に分析した一部を紹介する。(第一表)

公立の一年保育では一学級は、その地域の幼児数そのまま
が大部分で、四七人は二学級になっている点から四〇人を学
級定員として編制されていると見てよい。然し、平均値で見
ると三三人で、更にこれを日本私立連合会の「私立幼稚園の
経営実態調査報告書」昭和53年度の集計によって検討してみ

た。

報告園三二六二園のうち、最も高い百分率で示された学級
園児数は、五学級二二人〜一六〇人で、それぞれ、一五・
八、一五・一を占めている。この学級数園児数を単純に平均
して、二四人〜三二人と出るが、このあたりが平均数と見て
いるわけである。

▼担任し得る園児数には個人差

本園の教員に担任園児数はどの位がよいかを聞いてみた。
。現在、三歳児二六名を複数で担任しているけれども、五人
位、早退や欠席して二〇人位になった時、一番眼が届きや

第一表 茨城県下・市町村別幼稚園の実態調

資料 茨城県国公立幼稚園要覧 昭和55年度版

市町村別	国 公 私	保育年 数(年)	園 数	園 児数	学級数	保育年数別 学級平均 園児数	公私立別 学級平均 園児数
水戸市 県庁所在地	国	2・3	1	153	5		30.6
	公	1	22	1,952	54		36.15
	私	2・3	5	1,108	35	31.66	31.21
		2	5	541	17	31.82	
勝田市 工業都市	公	1・2・3	2	536	18	29.78	28.71
		2	2	205	7	29.25	
	私	1	3	197	7	28.14	36.14
		2・3	1	493	13	37.92	
		2	2	450	13	34.62	
1・2・3	2	1,117	31	36.03			
日立市 工業都市	公	1	16	1,433	45		31.84
	私	2・3	3	491	16	30.69	31.39
		2	5	634	20	31.70	
		1・2・3	1	241	8	30.13	
		1・2	2	235	7	33.57	
取手市 発展途上都市	公		0				
	私	3	1	373	10	37.30	33.59
		1・2・3	2	652	20	32.60	
		1・2	1	80	2	40.00	
岩井市 発展途上都市	公	1	9	663	20		33.15
	私	1	1	120	3		40.00
下妻市 農村都市	公	1	5	231	7		33.00
	私	3	1	116	4	29.00	26.44
		2・3	1	122	5	24.40	
鹿島町 鹿島開発	公	2	5	1,065	28		38.04
	私	1・2・3	1	213	8	26.63	28.00
		3	1	179	6	29.83	
神栖町 鹿島開発	公	2	3	425	14		30.36
	私	3	1	236	6		39.33
桜村 研究学園都市	公	2	5	912	30		30.40
	私		0				
谷田部町 研究学園都市	公	1	1	112	3	37.33	31.58
		2	3	267	9	29.67	
	私		0				
計			113	15,552	471		33.02

※同一市町村でも資料の不完全なものは除外した。

すい。

。あそんでいても友だちがなく、あそびがまとまらなかったり、友だちとの交りに片よりがでたりするので、二五人位のところ、三〇人では多すぎる。

。一七人というクラスの実験があるが、これではグループが固定していて、全体をまとめるのに困難を感じた。次の年度には二七人のクラスだったが、二二、三人というところが一番よかった。

。三歳児クラスならば一〇人程度が行き届いた保育ができて、最もよいと考えるけれども、劇あそび、合奏、または、普段の遊びとなると、この人数ではうまくいかない。

。前年度は二七人であったが、公立へ転園し二二人となったが、これでは少なすぎる。二四、五人程度。

。二七人を担任し、一、二人欠席者が出た時がとてもうまく行くような感じを持っている。二〇人では少なすぎる。

。三〇人をオーバーすると大変だと言う。それ程、いろいろのことで過重になるとは思わないけれども。

筆者が公立小学校時代に、作文を読んだり、採点をする仕事で、たしかに三〇人を越した頃からは、残りの枚数を数えたり、少しブラブラして再びとりかかった記憶は今も残って

いる。五〇人を越したら誰もが、一気に片づけることは無理だったけれども、それ以下の数では個人差はあっても、何とかなった。

何人になっても、その数に応じた処理法を発見した教師はいるけれども、個々の幼児を尊重し、幼児のうちに秘められたままものに刺激を与えて芽を伸びるような土壌を作るとなると、個々に応じた対応が要求されるので、どうしても三〇人あたりが限界か。

▼保育の形態によって

筆者は戦前、公立小学校で五〇人から八〇人のクラスを担当したが、八〇人となると、二教室をぬいての部屋で、うしろの子どもの顔もさだかでなく、素直に命令に服従させる画一授業で終らざるを得なかった。また、公立青年学校長時代、女子は被服が中心で、個人的な指導はあったが、男子は主として軍事訓練であり、技術的に個々に指導はするけれども、全体的に一致することをねらったもので、人員が多い程、迫力があって指導のしがいを感じられたように見受けられた。

このような授業形態の場合は定員というか人員は問題とならなかった。ところが、本園の保育形態はあそびが中心で、

第二表 実習記録に出た園児名調

常磐短大2年・河面恵子の実習記録から

園児名	月日	6/9	10	11	12	13	14	16	17	18	19	20	21	23	24	25
1男				○		○		○				○		○	○	○
2女		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3男			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	欠	欠	欠	○
4男			○	○	○	○	○	○		○	○			○	○	○
5男		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	欠
6男			○	○		欠	欠			○	○			○	○	○
7男		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		欠	欠	欠
8女		欠			○	欠	欠					○		○	○	
9男				○	○	○		○		○	○		○	○	○	○
10女			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○
11男		○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12男						○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
13男		○	○	○	○	○	○	○	欠	○	○	○	○	○	○	○
14男			○		○		○	○	欠			○	○	○	○	○
15男			○		欠		○	欠	欠	欠	○			○	○	○
16女		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
17男			○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
18女		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19女		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○
20女				○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○
21男					○	○	○		○	○	○					
22男			○	○			○		○			○				
23女		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○		欠	欠
計	記録 出席	9 22	17 23	18 23	16 22	16 21	17 21	18 22	14 20	18 22	18 23	18 23	11 22	17 21	17 20	17 20

八時三十分頃の登園から、昼食前後の一時余と、二時の降園前三十分前を除いては、子どもたちは自由に遊びまわるといのであるので、部屋の中での一斉保育がないために、園児の行動をとらえることとなると、困難なのである。

この六月に本園で実習した教育実習生に、特に依頼して、毎日の実習記録に、幼児とのかかわり、幼児のあそび、幼児のグループの構成具合など、できるだけ細かに観察記録をとるように願った。幸に、この実習生は本園の卒業生であり、住居も園に近い関係もあって寮生活をしていても、子ども顔と氏名が比較的よく捉えられたので、よい記録が残った。それにしてもこのクラスが二三人という園児数であることが一つの原因で、クラス担任ではとることができない記録となつたのだと考える。実習十六日間の記録に書かれた園児名を列記すると(第二表)となる。

▼園経営の立場から

私立幼稚園側からは、経営という点についても考えねばならないと思ひ、さきにあげた日私幼の経営実態調査報告書から、最高の百分率の係数を抽出し、収支のバランスを検討した。(第三表)

人件費支出対保育料収入の比率が七一・七はまあまあいい

ところだろうが、昭和五三年度の集計で、俸給及び定期昇給額は現在からすると低いので、最低線で訂正し再度計算してみた。それに加えて、学級数を変動させて検討し、経営可能なギリギリの線を導き出そうと試みた。(第四表)

本表で明らかであるが、五学級でも人件費を少し多くすると、比率が八六・六となり、とても窮屈となることがわかる。二三人平均のクラスだと經常費補助金がなければ経営は不可能となる。平均三五人当りが最も当を得た園児数か。

▼結論

戦後、小中学校にあっては大規模学校が優秀な学校という見方があって、幼稚園であっても三百、四百を志向するものも出てきた。然しこれは、現実に児童生徒の問題が続出して、社会的問題を提供しているように、知的なものが尊重され、人間としての個々の尊厳さなどはないがしろにされて、

○幼稚園教諭としてよりは、××学級教諭風な保育に走りがちで、園をあげて全職員がどの子に対しても対応する保育などは考えられない。保育年数にもよるが、百人以下の規模では保育面はよいが園経営から言って困難であるので、一二〇から一四〇人程度の園となると思う。

これを何学級にするかいろいろの面から見たわけである

第三表 収支バランス検討表 <1>

条件		%		算出の基礎	
収容園児数	140	15.12		●教員給	
編制学級数	5	15.75		初任給	83,000
教員数	園長1	教諭6		一年経験	85,000
保育料月額	10,000円	18.82		二年経験	87,000
教員給	初任給	83,000	16.74	三年経験	89,000
	定期昇給	2,000	22.61	四年経験	91,000
	期末手当	5ヵ月	41.78	五年経験	93,000
	手当	5,000	22.28	園長	100,000
				●所定支出金	
				私学共済規定による	
				退職財団標準給与の	$\frac{40}{1,000}$
収入	保育料	$10,000 \times 140 = 1,400,000$			
支出	人件費	$\div 1,003,000$			
	俸給	628,000			
	期末手当	$628,000 \times 5 \div 12 = 262,000$			
	手当	$5,000 \times 7 = 35,000$			
	所定支出金	私学共済	52,124		
		退職財団	25,960		
人件費支出		百分率		71.65%	
保育料収入					

学級数	4	5	6
平均園児数	35	28	23
教員数	園長	1	1
	教諭	5	6
教員給	664,000	772,000	884,000
期末手当	277,000	322,000	369,000
諸手当	30,000	35,000	40,000
所定支出金	私学共済	47,000	56,000
	退職財団	23,000	27,000
人件費支出計	1,041,000	1,212,000	1,389,000
人件費支出	百分率		
保育料収入	74.36	86.57	99.21

が、理想的には二五人のクラス当りがよいと考えられる。この数を定員とするには、四〇人定員で三三人が平均であるという点からみて、平均学級当りの園児数は二〇人程度で、これではグループ活動にしても、全体的な合奏とか劇あそびとかいうものでは迫力がないのみでなく、子ども同志の交りもよくは行かないのではないかと思う。三五人定員、学級平均二八、九人というところだと、経営面では少し苦しいが妥当と言ってよいと思うのである。三〇人定員、学級平均二五人では理想であるけれども、経常費補助が、教育研究費管理費をカバーしてくれるのでなくては、経営に支障があるので、裏付けとなる経常費補助額によって、これは考えるべきだろう。

(茨城・下妻小友幼稚園)

訂正

七十九卷 十二月号 五ページ 五行目

一八五二年 ↓ 一七八二年

第四表 収支バランス検討表(2)

●条件			
園児数	140		
保育料月額	10,000		
人件費			
	俸給	標準給与	私学掛金
教員	84,000	84,000	6,972
	88,000	88,000	7,304
	92,000	92,000	7,636
	96,000	96,000	7,968
	100,000	100,000	8,300
	104,000	105,000	8,715
	108,000	110,000	9,130
園長	100,000	100,000	8,300
	退職財団掛金		
	標準給与 × $\frac{40}{1000}$		
	※千円未満切上げ		